フルブライト語学アシスタントプログラム（FLTA）

2024 年度　参加者レポート

平川彩舞鈴　George Mason University, Fairfax, VA

2024 年度、私はバージニア州にある州立大学・George Mason University に派遣され、2025 年 6 月末までの約 10 か月間をアメリカで過ごしました。帰国後は現在、勤務校への復職を控えて少しの休暇を取っており、日本の田舎ならではのゆったりとした日常の中で過ごしています。静かな時間のなかで思い返すのは、まるで夢のようだったアメリカでの一年間の生活です。現地での経験を思い出すたびに、寂しさや「もう一度戻りたい」という気持ちが自然と湧いてきます。もちろん、この一年が常に順風満帆だったわけではありません。留学が始まってから何か月も、何度も悩み、心が折れそうになることもありました。けれど、そうした苦しい時間も、今となっては私の中でとても大切で、かけがえのない経験となっています。

以下に記すのは、そんなアメリカでの生活の中で私が経験したことの一部です。あの時間を改めて振り返りながら、心の中に残った思いや学びを言葉にしていきたいと思います。

応募〜派遣まで

アメリカで中期から長期の留学をすることは、大学入学当初からの夢の一つでした。英語力を高めるだけでなく、文化の違いを学び、それを将来子どもたちに伝えて、英語や文化学習に興味を持ってもらいたいと考えていたからです。

FLTA プログラムは大学の教授に教えていただきました。その先生も元 FLTA で、経験談を聞くうちに私も参加したいという気持ちが強くなっていきました。応募を決めたのは大学 3 年の 3 月で、7 月末の締め切りまで教員採用試験の勉強と並行して準備を進めました。大学の先生方には書類の添削や面接練習など多くのサポートをしていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。先生方の協力がなければ合格は難しかったと思います。

9 月末に内定通知が届き、翌年 3 月に派遣先大学のリストが送られてきました。正式決定は 5 月で、その後ビザの面接を経て渡米しました。大学卒業後の 3 月から派遣の 8 月までは、公立高校で英語教師として勤務しました。初年度で余裕がなく、準備に十分な時間を取れなかったことが心残りです。実際に行ってみないと分からない部分も多いですが、大学や地域、授業やクラブ活動についてもっと事前に調べておけばよかったと感じています。

派遣先大学・現地での生活について

私が派遣された George Mason University は、ワシントン D.C. 近郊のバージニア州にある州立大学です。学生数は約 4 万人で、そのうち留学生は約 5000 人。130 か国以上から学生が集まり、全米でも特に多様性のある大学として知られています。日本人留学生は片手で数えるほどしかいませんでしたが、世界中の学生と交流できる環境が魅力でした。

キャンパスでは各国の文化を紹介するイベントが多く開催さ

International Week の様子

キャンパスの様子

れており、International Cafe や International Week などを通して、多様性を肌で感じることができました。

私の住んでいた Fairfax 市は自然も多く治安も良い町でしたが、車がないと不便な面もありました。市営バスや大学のシャトルバスは無料でしたが、最寄りのスーパーまでは往復で 1 時間ほどかかりました。モールまでも遠く、ハウスメイトや友人の車に頼ることもよくありました。私は寮ではなく、自分で見つけた住まいに住んでいたため、食事は基本的にすべて自炊でした。少し手間はありましたが、自分で作った日本食は大きな心の支えとなっていました。

平日は Fairfax で過ごしていましたが、週末には電車で約 40 分かけてワシントン D.C. に出かけ、美術館や博物館を巡ったり、イベントに参加したりしていました。ほとんどの施設が無料で開放されており、都市近郊に住むことの利点を実感しました。

前期の日本語の授業

前期の授業はオンライン形式で行われ、私は授業の最初の 30 分間を担当しました。オンラインで教えるのは初めてで、学生からも対面でないことへの不安の声があり、なかなかつながりを感じるのが難しい時間でもありました。10 月からは対面でのチューター業務が始まり、授業の内容を補ったり試験前の学習支援をしたりと、学生との距離が少しずつ縮まりました。チューターはすべて任せてもらえたのですが、日本語をどう教えるか、どのように母語を説明するかには大いに苦労しました。

また、私の派遣校では FLTA の受け入れが今回で 2 人目ということもあり、大学側も TA にどこまで何を任せられるのか手探りの状況だったように思います。スーパーバイザーの先生と話す中で、授業にもっと関わりたいことや自分の不安を伝えることができ、後期からは対面授業にも多く参加させてもらえるようになりました。後になって知ったのですが、FLTA は対面授業への参加が求められていたそうです。私も大学もその点について詳しい説明を受けておらず、前期はすべてオンラインで進めてしまいました。

業務内容については学期が始まる前にしっかり話し合っておくべきだったと感じています。アメリカでは自分の希望や意見を伝えることがとても大切で、たとえ TA であっても遠慮せずに対話を重ねていく姿勢が必要だと学びました。この経験を通して、自分の気持ちを素直に伝える力と、新しい環境に対応する力が身についたと思います。

前期で履修した授業

1. Intro to Women/Gender Studies

この授業では、アメリカにおいて女性がどのような歴史をたどり、どのようにして権利を獲得していったのかについて学びました。もともとアメリカの歴史や女性の権利に関心があったため、履修を決めました。日本ではあまり触れることのなかった視点から女性の歴史を知ることができ、特に授業中のディスカッションでさまざまな意見を持つ学生たちと考えを交換できたことは、とても貴重な経験でした。

2. Fall of the Roman Empire History

ローマ帝国の衰退とその背景について学ぶ授業でした。私は世界史が好きで、高校時代に日本語で学んだ内容を英語で改めて学び直すことで、内容の理解を深めることができました。また、授業で紹介された遺物や歴史的背景に関連する展示を、自ら博物館まで足を運んで見に行く機会もあり、学びをより実感することができました。

授業の様子

Japanese Student Association での活動について

George Mason University には JSA（Japanese Student Association）という日本文化交流クラブがあり、私は前期から board member として積極的に活動していました。参加のきっかけは、日本文化を広めるイベントを企画したいという思いと、オンライン授業で感じていた孤立感から、つながりを求めたことでした。JSA のメンバーは私が TA であることを気にせず、対等に接してくれました。

日本人留学生が少ないこともあり、すぐに執行部員として活動に加わり、巻き寿司づくり、ガンダムづくり、ポッキーの日などのイベントを開催しました。巻き寿司イベントでは食材費が課題となりましたが、きゅうり・カニカマ・卵など手頃な材料を使うことで 50 名以上が参加する楽しいイベントとなりました。また、先輩･後輩文化を体験する「Family Week」や、日本に関するクイズを行う「Jeopardy Night」なども実施しました。JSA は参加費無料のため資金不足が常に課題でし

たが、Fundraising でおにぎりを販売するなど工夫を重ねました。

一方で、私の留学中で最も悩んだのが「Kaiwa Table」の運営でした。これは日本語を学ぶ学生のための会話練習の場として設けられていましたが、実際にはクラブの仲良しメンバーの溜まり場のようになっており、日本語に興味がある新しい学生が孤立してしまう場面が何度もありました。雰囲気を変えようと日本のゲームを取り入れるなど試みましたが、なかなかうまくいかず、英語力への不安から自分の思いを伝えきれなかったことも悔しい思い出です。前期の「Kaiwa Table」は数回の開催で終わってしまいましたが、こうした経験を通して、自分の力不足や課題にも正面から向き合うことができました。後期にはこの反省を生かし、改善へとつなげていきました。

Sushi night での様子

ダンスチームへの参加について

前述したような理由から、私は大学内のダンスチームにも参加しました。このチームでの経験は、アメリカの文化を肌で感じ、英語力を実践的に伸ばす貴重な機会となりました。

チームに参加したばかりの頃は、練習中の指示を理解することで精一杯で、チームメイトとの雑談に加わる余裕は全くありませんでした。会話のスピードは非常に速く、スラングも多用されており、最初は何が分からないのかすら分からない状態でした。しかし、練習を重ねるうちに少しずつ会話の内容が聞き取れるようになり、スラングの使い方もチームメイトから教えてもらいました。私自身も積極的に新しい表現を使ってみるようになり、言葉を通して距離が縮まっていくのを感じました。

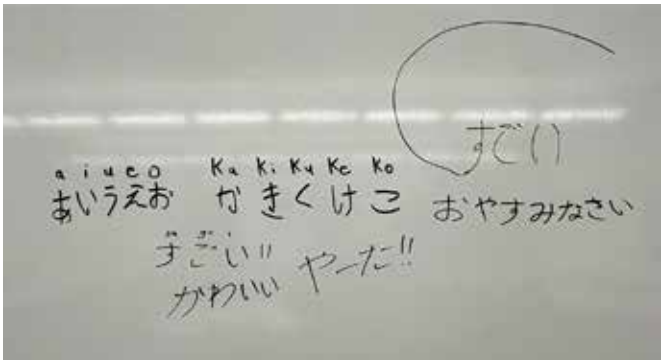
私以外に留学生はおらず、チームメイトはブラック、ホワイト、ラティノ系と人種的にも多様で、そうした背景の違いから来る文化についての会話も印象的でした。アジア人が私一人だったため、最初は少し寂しさを感じることもありましたが、チームメイトたちのあたたかさや思いやりのおかげで、孤立することなく、一年間楽しく活動を続けることができました。チームでの経験は語学力の向上だけでなく、人種や文化について深く考えるきっかけともなりました。

後期の日本語の授業

前期の活動を経て、スーパーバイザーと話し合いを重ねた結果、後期からは対面授業を担当させてもらえることになりました。また、より多様な日本語レベルの学生と関わりたいという希望を受け入れていただき、アシスタントとして関わる授業数も、前期の 3 コマから後期は 9 コマへと増やしていただきました。授業では、教壇に立つ機会は少なかったものの、机間巡視や授業外での学生との対話を通して関係を深めることができました。また、毎週の小テストの丸付けや成績の評価も任され、学生の理解度を把握し、それをもとに授業やチューター指導へ反映させるというサイクルを体験できました。テストで 80 点以上を取った学生には日本から持参したシールをプレゼントしており、学生から喜ばれたりリクエストをもらったりすることで、学習へのモチベーション向上にもつながったと思います。

また、前期に引き続きチューターとしても活動し、授業外で日本語を学びたいという学生に個別で対応しました。日本語の文法について説明する力もつき、自分自身の成長を実感できた経験でした。チューターの場では、日本留学に興味を持つ学生も多く、JET プログラムやサマープログラムについて情報提供を行った結果、複数の学生が実際に日本へ留学することになりました。彼らの背中を押すことができたことは、私にとって大きな喜びでした。

さらに後期からは、日本語のスピーキング力を伸ばしたいと



ひらがな学習後の様子

いう学生の声に応えるかたちで、「日本語会話セッション」も開始しました。レストランでの注文や道案内といった、実生活に即した会話表現を繰り返し練習し、発話への自信をつけてもらうことを目指しました。参加人数は少数でしたが、その分じっくりと練習することができ、実践的な日本語力の習得につながったと感じています。

後期を通じて、前期の経験を基により積極的に学生をサポートできるようになったと思います。母語である日本語を文法的に分析し、それをわかりやすく伝えることの難しさを何度も感じましたが、試行錯誤を重ねた結果、指導に対して自信を持つことができるようになりました。

後期で履修した授業

1. Children's Literature for Teaching in Diverse Settings

この授業では、絵本を授業にどのように取り入れるかを学びました。毎回異なる絵本を読み、その文化的背景や、子どもたちにどのような影響を与えるのかについて考察しました。私は英語の絵本にそれほど馴染みがなかったので、たくさんの作品に触れられたことはとても新鮮で貴重な経験でした。授業の終盤には、自分で選んだ絵本を分析し、どのような場面でどのように授業に導入するかをプレゼンテーションしました。バージニア州の学習指導要領も参考にしながら発表を行ったことで、教師としての視点を広げることができたと思います。GMU では教育系の授業の多くが大学院生向け、あるいはオンラインでの開講だったため、こうした授業を対面で受講できたことは本当に嬉しかったです。

2. U.S. American Cultures

この授業は、留学 1 年目の学生を対象にアメリカの人種や文化について学ぶものでした。クラスには中国系やアラブ系の学生が多く在籍しており、文化的背景の異なる人々と交流することができたのは非常に興味深い体験でした。また、担当の教授が Fulbright 出身の方であったため、FLTA として渡米していた私に大変親身に接してくださり、特に情勢不安により精神的に不安定な時期には多くの支えをいただきました。この授業を通して、アメリカという国の多様性とその複雑さを深く学ぶことができたと感じています。

後期の JSA での活動について

前期は JSA に加入したばかりで、いきなり board member になったこともあり、クラブの仕組みを理解するのに精一杯でしたが、後期はさらに積極的にイベントや「Kaiwa Table」の運営に取り組むことができました。

後期に開催したイベントは、オムライス作り、運動会、J-Drama Night、節分、バレンタイン、春祭り、Culture Night など多岐にわたり、前期よりも活発に活動を展開できたと思います。特に印象に残っているのは、春祭りと Culture Night です。春祭りでは日本から持ってきた浴衣を学生に着てもらい、射的、流しそうめん、たこ焼き、ヨーヨー釣り、チョコバナナなど、できるだけ本物のお祭りの雰囲気に近づけるよう工夫しました。Culture Night では、習字やかるた、けん玉、福笑いなど、日本の伝統的なおもちゃやゲームを紹介し、正月らしい文化体験を楽しんでもらいました。

また、前期の大きな課題であった「Kaiwa Table」も改善に努めました。まずは board member にも参加してもらい、場の雰囲気をより温かく、開かれたものにすることから始めました。参加者の顔ぶれや日本語レベルは毎回異なりましたが、それに対応したレベル別の活動を用意することで、全員が楽しめる場づくりを意識しました。特に盛り上がったのは、ことわざかるたの回です。かるたを通して日本語のことわざを学び、英語での類似表現を探しながら文化的な共通点や違いについて語り合うことで、相互理解が深まったと感じています。授業やチューター活動で忙しい中でも、こうした活動を続けられたのは、周囲の協力と、参加してくれる学生の存在があったからこそだと実感しています。

Culture night での様子

春祭りでの一幕

ＦＬＴＡの仲間について

GMU には、私のほかにも FLTA としてアラビア語（2 名）、中国語、韓国語、ロシア語（昨年度からの継続）を担当する仲間がいました。それぞれが異なる授業や生活スタイルを送っていたため、頻繁に会う機会はありませんでしたが、時折一緒に食事をしたり話をしたりする時間は、私にとって非常に貴重なものでした。

彼女たちとの会話では、アメリカ以外の文化や教育事情について多くのことを学ぶことができました。特に、文化や宗教、言語に関する話は、自分の視野を広げてくれるものであり、多様性を肌で感じることができました。また、異国の地で生活する中で困難に直面した時、同じような立場で頑張っている彼女たちの存在に何度も救われました。中には、途中で帰国することになってしまった仲間もいましたが、その人からも多くのことを学ぶことができました。

このように、世界中から集まった仲間たちと出会い、支え合いながら一年を過ごせたことは、FLTA プログラムならではの経験であり、私にとってかけがえのない財産となりました。

FLTA の仲間と

終わりに

この 10 か月間の活動を通して得られたものは、言葉では言い表せないほど大きなものでした。語学力の向上はもちろんのこと、それ以上に、異なる文化を受け入れ、理解しようとする姿勢、思いを伝え合うことの大切さ、人とのつながりの温かさ、自分自身と向き合い、成長していく力を学びました。もちろん、すべてが順調だったわけではありません。思い通りにいかなかったこと、悔しくて涙を流したこと、自分の未熟さに落ち込んだ日も数え切れないほどありました。それでも、失敗を恐れずに一歩ずつ前に進むことで、見える景色が変わっていくことを実感しました。そしてその度に、支えてくれる人たちの存在のありがたさを心から感じました。困難なときに励まし続けてくれた家族、日本とアメリカの友人たち、温かく迎え入れてくださった大学の先生方、そして常に細やかにサポートしてくださった日米教育委員会、IIE の皆さまには、感謝の気持ちでいっぱいです。

この一年間は、私の人生の中で間違いなく最も濃く、価値ある時間でした。得た経験を糧に、これからも自分らしく、そして誠実に歩んでいきたいと思います。ありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム（FLTA）

2024 年度　参加者レポート

松田みると　Carleton College, Northfield, MN

こんにちは！2024 年度、FLTA として Carleton College に派遣された松田みるとです。Carleton は毎年アメリカのリベラルアーツカレッジのトップ 10 にランクインしている名門校で、学生数も 2000 人程度と少なく、教授と学生の距離が近いのが特徴です。ミネソタの Northfield という小さくて穏やかな町にあり、全寮制なので学生は全員キャンパスに住んでいます。そのため、学生同士も intimate で友達が作りやすい環境です。靴を履かない人や携帯を持っていない人など、個性的な人が多くて愉快な大学です。

キャンパス

出国前

大学 2 年生当時、英語教師を目指して教育学部に通っていた私は、FLTA 同窓生である教授にお話を聞き、このプログラムについて知りました。私は人生で一度は英語圏に留学したいと思っており、所属していたゼミで日本語教育や外国籍児童への支援などを勉強していたため、これは自分にぴったりのプログラムだ！と思い、すぐに応募を決めました。教授のお話を聞いたその日に「絶対にこれに参加する」と決めたため、教員採用試験の受験も就活もしませんでした。

4 年生になってから IELTS の勉強を本格的に始め、それと同時にエッセイの執筆や推薦状の依頼なども始めました。6 月末に IELTS を受験し、FLTA の応募締切日の前日にやっと必要書類を全て提出することができました。(卒論との両立が大変だったので、もう少し早く準備を始めればよかったです！) 8 月末に書類審査通過の連絡とオンライン面接があり、そこでは主に志望理由とエッセイの内容について深掘りされました。FLTA のホームページには 9 月下旬に面接の結果通知があると書かれていたものの合格の連絡が来たのは 10 月半ばだったので、その時期は毎日ハラハラドキドキでした。その後期間があいて 3 月上旬に 5 つの候補大学が知らされ、希望順にランキングづけしたあと、5 月中旬に Carleton への派遣が決まりました。Carleton は第 3 希望の大学で、アメリカに留学するなら大きな都市に住んでみたいと思っていたため、極寒の小さな町に派遣されると決まった時はとても落ち込みました。でも、3 月に大学を卒業してから 9 月にアメリカに行くまでたくさん時間があったので、せっかくなら Gap year だと思うことにしてアルバイトでお金を貯めてヨーロッパ旅行をしました。そのせいで 6 月上旬に行われたアメリカ大使館でのリセプションに参加できなかったのは残念でしたが、旅行自体はとても楽しかったです。周りの同級生が新卒として働き始めている中で自分は何をしているんだろう?と不安になる日もありましたが、自分で決めたことだったので心を強く持ってなんとかこの期間を乗り越えました。

大学生活

Carleton は 3 学期制で、各学期は 10 週間だけです。そのため、授業が intense で宿題も多く、一度でも休むとついていけなくなります。学生のみなさんは学期中ずっと土日関係なく勉強していて、一般的な日本の大学生とは全く違う生活をしています。近くの大都市であるミネアポリスに行くにはバ

LA のみなさんと

スで 40 分ほどかかり、キャンパス周辺も遊べる場所はほとんどないかわりに、クラブやサークル活動が盛んで、毎日様々なイベントがあります。Northfield はリスやウサギがたくさんいて夜一人歩きできるくらい安全な町です。

この大学には日本語、中国語、ロシア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、アラビア語の 7 人の Language Associate (LA) がいて、Parish House という寮で共同生活を、LDC という建物で仕事をします。LA は全員ミールプランに加入しており、無料で食堂やカフェテリアを使うことができます。寮費もかからないため、生活するのにお金はかかりません。キッチンやバスルームは共用でしたが、部屋は別だったので生活のストレスは何もありませんでした。

LDC の朝食

LA としての仕事

LA としての毎週の業務は以下の通りです。

①授業観察 (1 時間)…文法導入がある日に授業観察に行き、授業の仕方を学んだり机間指導をしたりします。

Office Hour の様子

② JPN100 の授業計画 (2 時間) と代講 (2 時間)…金曜日の 1 時間目と 4 時間目に授業をします。秋学期の初めは、水曜日に授業計画を提出➡木曜日にミーティングと計画の修正➡金曜日の 1 時間目に授業 (教授が授業観察) ➡反省のミーティング➡ 4 時間目に一人で授業という流れでした。秋学期が半分過ぎたころには教授による授業観察と反省のミーティングはなくなりました。授業は時間配分やアクティビティなど全て自分で考え、スライドも自分で作ります。内容は文法や読みもの、日本文化など様々でした。

③宿題と小テストの採点 (5 時間)…日本語の授業はほぼ毎日宿題と小テストがあるので、チューターの日本人学生と分担しながらそれを採点します。

④日本語イベントの運営 (計 2 ～ 4 時間)…火曜日にお茶会、木曜日にランチテーブル、金曜日 (隔週) に映画ナイトがあります。お茶会で作る料理や映画ナイトで観る映画を決め、準備・運営をします。これらのイベントは日本語の学生のみなさんと授業以外のことも話せるいい時間でした。

⑤ JPN100 と JPN200 の会話練習 (3 時間)…木曜日と金曜日にその週習った文法を復習できるようなトピックで 3 ～ 4 人のグループごとに会話をします。奇数週は JPN100、偶数週は JPN200 の学生が相手です。

⑥オフィスアワー (3 時間)…火曜日と日曜日に Language Center の一室で学生の質問に答えたり会話練習をしたりします。日本語の授業を取っていない学生も来ることがあり、この時間を通して仲良くなれました。

⑦ Japanese Department の宣伝活動…毎週のイベント情報を Weekly News Letter で配信したり、インスタグラムでイベントの様子を投稿したりします。

これに加え、Carleton の LA は一学期に 1 つ Audit ではなく Credit で授業を履修しなければならなかったので慣れないうちは仕事と学業の両立が大変でした。業務に慣れ、学生のみなさんと仲良くなってからは楽しく働くことができました。授業をするのがいちばん楽しかったです。

秋学期

何もかもが初めてだった秋学期は、やはりいちばん大変でした。特に大変だったのは金曜日の授業代講です。1 週目から代講があり、どのように授業を組み立てればいいかわからないまま何とか授業計画を立てて授業を行っていました。日本語の授業をすることもアメリカの大学生に授業をすることも初めてだったので、毎週代講前はとても緊張していました。授業前日のミーティングでスライドに使う文字のフォントから授業内容まで全てやり直しになることもあり、毎回ミーティングに行くのが憂鬱でした。

取りたかった授業は requirement を満たしていなかったり

仕事の時間とかぶったりで取れず、最終的に "Popular Music in Middle East" という中東の現代音楽とその歴史について学ぶものを取ることに決めました。毎週リーディング課題がとても多く、少人数のディスカッションベースの授業だったのでなかなか苦労しました。授業中も全然発言できず、毎回授業終わりにがっかりしていました。それ以外にもスーツケースが壊れたりコロナにかかったりと不運が続き、最初の一か月はずっと日本に帰りたいと思っていました。

そんな中心の支えになったのは台湾人の LA と日本人学生のみなさんでした。台湾人の LA は 3 歳年上のアメリカの留学経験があるお姉さんで、いつも私を気にかけてくれました。文化が似ていることもあってすぐに仲良くなり、よく一緒に遊びに行ったり悩みを相談し合ったりしていました。日本人学生のみなさんとは山田大使の訪問をきっかけに知り合い、その後定期的に飲み会やお料理会をして集まりました。みなさんは優秀なだけではなく、とてもやさしくて面白かったので、仲良くなりはじめてから毎日が格段に楽しくなりました。母国語で話せる人がたくさんいるという環境は本当にありがたかったです。

日本人学生のみなさんと

CIH の様子

秋学期のあとは 6 週間の長い休みがありました。そのころミネソタは冬に入りかけていてとても寒かったので、できるだけ暖かい場所に行こうと思い、友人に会いに DC、メリーランド、カリフォルニアを巡った後、休みの後半は全てフロリダで過ごしました。フロリダでは Miami と St. Augustine に宿泊しました。Miami は 12 月なのにほぼ夏のような気候で、海に入れるほど暖かかったです。St. Augustine では CIH (Christmas International House) に参加しました。これはアメリカの大学にいる留学生を対象とした、クリスマスからお正月にかけてのホームステイプログラムで、200 ドルだけで 2 週間分の食事と宿泊場所が提供されました。悲しいことにクリスマスイブにノロウイルスにかかったりもしてしまいましたが、セーリングやアリゲーターファーム訪問などアクティビティがたくさんあり、他の国から来た留学生と交流する機会もあって充実したステイになりました。今後の FLTA のみなさんにもおすすめです！

冬学期

冬学期はとにかく寒かったです。気温が－30℃まで下がることもあり、息を吸うと鼻の中が凍ってしまうほどでしたが、屋内は暖房が効いていたので寮や校舎の中では薄着で過ごせました。日照時間も短かったので Winter

Northfield の冬

depression になってしまうのではないかと心配でしたが、キャンパス内でスケートやそり滑りなどミネソタならではの遊びができたり、Date Knight や Midwinter Ball といった大規模なイベントがあったりして案外楽しむことができました。Date Knight は本来初対面の人とデートをするというイベントでしたが、私は台湾人の LA と 2 人で観察しにいきました。Midwinter Ball は年でいちばん大きなダンスパーティーで、LA 全員で踊りにいきました。この頃には Carleton での生活にも慣れ、仕事や生活を楽しむ余裕が出てきました。

この学期は "Elementary Greek" という古代ギリシャ語の授業を取りました。言語のクラスなので毎日授業があり、宿題やテストも多くて大変でした。私はもともとギリシャ語が話せたのですが、日本語でも古文と現代文が全然違うように古代ギリシャ語も現代ギリシャ語と全く異なり、毎日勉強しないと授業についていけませんでした。偶然にも日本語と同じ教室だったので、毎週金曜日は同じ教室で1時間目に先生として日本語の授業をし、2 時間目に学生として古代ギリシャ語の授業を受けていました。この授業では古代ギリシャ語の単語や文法を覚えながら英単語の語源を学んだりギリシャ神話を訳したりしました。ほぼ毎週 TA の方のオフィスアワーに行ったので A を取ることができました。大変でしたが、どれか 1 つの授業で A を取ってみたいと思っていたので嬉しかったです。言語のクラスを取っている学生の大変さを実感できたし、言語の教え方の勉強にもなったので取れてよかったです。

学期後は 2 週間の休みがあったので、同じく留学中だった弟に会いにトルコに行きました。カッパドキアで気球に乗ったのは一生の思い出です。

授業の様子

春学期

冬学期と打って変わって春学期はとても天気がよく、仕事のストレスも減ったため心晴れやかに過ごすことができました。この学期では "Black History in Film" という授業を取り、もともと映画の中でピエロや悪人のような役しか与えられなかった Black の人々がヒーローや主人公の役を演じることができるようになるまでの戦いの歴史を学びました。HIPHOP が好きな私にとってこの授業は毎回とても興味深かったです。毎週火曜日に映画を観て木曜日にそれについてディスカッションをするというもので、宿題もそれほど多くなく、楽しく受講することができました。この授業ではときどき自分の意見が言えたので嬉しかったです。

しかし、このプログラムが終わってから何をするか決めていなかったため、将来の不安が膨らむ時期でもありました。そのうえ、1 月ごろに出身の教育委員会に講師登録をしたものの 3 月まで何も連絡がなかったため、就活を始めることにしました。4 月はほぼ毎日オンライン面接があってストレスフルでしたが、学期末に無事内定をいただき、8 月から働くことが決まりました。就活ではこのプログラムでの経験が大きな強みになりました。

大学では最後に Sproncert という大きなコンサートがあり、少し有名なラッパーのライブや花火があってとても楽しかったです。日本の大学では考えられない規模で、 10か月を通して一番の American experience でした。学期が終わってからの grace period では、プエルトリコとニューヨークとバンクーバーへ旅行し、ミネソタに戻って少し休んでから日本に帰りました。ニューヨークでは 1 人でホステルに泊まってブロードウェイのショーを観に行ったり、SUMMIT One Vanderbilt に行ったりしました。人は多すぎるし物価は高すぎるしで疲れました

Sproncert

が、良い経験になりました。大都市を訪れたあとには、やっぱり穏やかな Northfield で留学生活が送れてよかったなと思いました。

ニューヨーク

帰国後

6 月末に無事帰国し、今は 8 月に始まる仕事に向けて準備をしながら体を休ませています。今思うと、実際に社会に出て働く前に FLTA として半分学生・半分社会人のような期間を挟むことができてよかったです。

私はこのプログラムを通してたくさんの新しい経験をし、これからもずっと関わっていきたいと思える、様々なバックグラウンドを持つ人々に出会うことができました。本当にスペシャルな時間で、何歳になっても思い出すと思います。Carleton は最初なかなか馴染めなかったですが、気がつけばとても居心地のいい場所になっていました。今でも Language Center でみんなとお話したり LDC でご飯を食べたりする夢をみるくらい、自分にとって home のような場所で、もうその生活ができないと思うととても寂しいです。でも、この 10 か月間はしたいことが全部できたので後悔は全くありません。アメリカの口座残高は 2 ドルですが！笑

関わってくれた全ての人、そしてこのプログラムに参加すると決めて最後までやり遂げた自分自身に心から感謝しています。Thank you so much!

フルブライト語学アシスタントプログラム（FLTA）

2024 年度　参加者レポート

白井沙都　Spelman College, Atlanta, Georgia

ジョージア州アトランタにある、HBCU (Historically Black Colleges and Universities)18 年連続1位を誇るスペルマン大学に派遣されました白井沙都です。現職の公立中学校教諭で、2024 年 8 月から 2025 年 5 月まで、自己啓発休暇を使用して FLTA program に参加しました。

応募〜派遣について

大学卒業後、中学校教諭として働き始めました。配属の学校に外国籍の生徒が多く、生徒の英語の流暢さに感化される毎日でした。また、保護者と英語でやり取りをすることもあり、英語を使うことが授業以外にもある環境でした。そこで英語の教員として、自分の英語力を高めたいという思いと、自分が外国人として他国で暮らす経験をしてみたいという思いが芽生えました。教員 2 年目の 6 月に「教員　留学」と検索し、情報を収集していました。そのときに見つけた、語学力をつけることができ、語学教員としての経験を積むことができるこのプログラムはぴったりだと思い、応募を決めました。締め切りまで 1 か月半ほどしかなかったので、すぐに TOEFL を申し込み、受験をしました。また、推薦状を 3 通用意する必要があったので、勤務先の中学校長、ALT の同僚、卒業した大学のゼミの教授にお願いしました。そして、エッセイをいくつか書き、なんとか 7 月 31 日の締め切りに間に合いました。書類審査合格のメールを 8 月にいただき、8 月後半にオンライン面接がありました。10 月後半に最終候補生に選ばれたとの連絡があり、少しほっとしました。それから 3 月に候補校のリストをいただき、各大学のホームページや気候、町の様子を調べながら行きたい大学のランク付けをし、5 月についに派遣先が決定しました。本当にうれしかったです。ここまでの道のりは長く、ほんとうに行けるのか不安でしたが、英語学習により力をいれたり、FLTA の先輩方のレポートを見たりして、気持ちを奮いたたせるようにしていました。

TA の仕事について

日本語のコースは人気で、前期・後期それぞれ4コースずつ開かれていました。スペルマン大学では、”I have a dream.” の演説で有名なキング牧師の卒業校のモアハウス大学、またクラーク大学の学生も日本語を履修できる制度となっております。

前期は日本語初級 101、日本語上級 301、Introduction to Japan and China for business and travel の 3 つの授業を教授のアシスタントとして担当しました。日本語は大学で初めて勉強する学生がほとんどでした。日本の文化に興味がある学生が履修していたので、意欲のある学生がとても多かったです。通年、tutoring hours を週に 2 時間ほど行いました。個別で教えることができるので、会話練習をメインで行いました。定期的に訪れてくれる学生はクラスの中で突出して上手になっていき、やりがいを感じました。business and travel の授業は日本と中国の社会や労働環境、女性問題について意見交換をしました。スペルマン大学の学生はとてもパワフルで、ディスカッションは常に白熱していました。互いの文化を共有し、視野を広げる良い機会となりました。

後期は日本語初級 101 と 102、Special Topics in Japan という授業を担当しました。5 月から 4 週間、千葉の大学で行われる summer　program に参加する学生が多かったので、

坊主めくりを楽しむ学生たち

より一生懸命勉強していました。Special Topics in Japanでは、前期のコースから発展し、より深く日本社会について考えました。日本の教育制度、宗教観、POP culture, 労働環境・女性問題についてプレゼンテーションを行いました。日本社会のよいところ、改善すべきところをアメリカ人の視点から聞ける大変有意義な時間となりました。彼女たちにとって私は初めて会った日本人なので、いつも興味をもって多くの質問をしてくれました。そして、今まで自分は何も考えてなかったことと、日本文化のことをあまり知らないことを思い知らされました。例えば、「軍隊を保有していないってどういうこと?」「原爆について、どのように学校で教えている?アメリカのことを日本人はどう思っている?」「なぜ先進国なのにジェンダーギャップ指数は改善されない?」など、尋ねられたときは知識・英語力不足を痛感しました。講義をとってくれている学生に学びがあったと思ってもらえるように、一週間かけてプレゼンテーションの内容を考えました。考えが詰まってしまったときは、大学時代のゼミの教授にZOOMで意見交換をしていただきました。最後の講義のときに、"So how are you planning to make use of this experience when you go back to Japan?" と学生から質問されました。そのときは焦ってしまって自分がなんと答えたのか覚えていないのですが、今でもこの質問の答えを考え続けています。

最後の日にお花とメッセージをプレゼントしてくれました！

Cultural Ambassadorとして（JAPANクラブ＆さくら祭り）

隔週で日本好き同好会、JAPAN clubが行われました。毎回15～20人のスペルマン大学とモアハウス大学の学生が集まっていました。代表メンバーが日本の文化についてプレゼンテーションをし、その後アニメをみるという、リラックスした楽しい時間でした。日本の歌舞伎・ファッション・漫画業界・環境など多岐にわたるトピックでした。10月にはコスプレ大会が行われ、好きなアニメキャラクターのコスプレをしていました。日本への愛が強い学生たちと共に過ごせるこの時間が好きでした。3月にはさくら祭りという日本文化を経験する祭りが開かれました。日本ゲームとジブリ映画のセッションはJAPANクラブのメンバーと協力して運営しました。坊主めくりとおはじきが大盛り上がりで、日本の伝統ゲームの素晴らしさを改めて感じました。他にも習字、折り紙、着物体験のセッションを開き、合計130人ほどの学生が参加し、大成功を収めました。日本語を履修していない学生も、文化に興味を持って参加してくれる学生が多く、日本人として嬉しかったです。

桜祭り

Japan club

履修した授業について

前期は Orientation to education と Bible and sexuality を履修しました。教育の授業は、教育格差の問題や人種差別の問題について話し合うことが多く、黒人学校ならではの授業で大変勉強になりました。チームプレゼンテーションも多く、パワーポイントを作ったり、練習を何度もしたりしました。中学の授業で活用していたサイトをプレゼンテーション内で使用したときは高評価をいただけてうれしかったです。Bible and sexuality の授業は、reading assignments の量が多く、また用語が難しいので予習に時間を費やしました。ディスカッションベースの授業だったので学生の早い英語について行くのに必死でした。クリスチャンではない学生も聖書の基礎知識をもっていることに驚きました。

後期は、Elementary Spanish と Make the modern world という歴史の授業をとりました。言語の授業は、ネイティブの学生とあまり差がないので緊張せずに受けることができました。また、英語で言語を教える勉強にもなりました。同じ language department のプロフェッサーだったので、すごく仲良くしてくれて私がアメリカを発つ前にたくさんのプレゼントをくれました。歴史の授業は奴隷制度のことを中心に、今のアメリカが築かれる過程を学びました。この授業も reading assignments が多く、予習が大変でした。

授業のトピックによっては英語での語彙が全くなく、苦しかったです。教育の授業は比較的、日常で使う用語が多かったのでついていくことができましたが、歴史の授業は初めて聞く単語が多く、英語力のなさを痛感する時間でした。英語の勉強は永遠に続くことを身に染みて感じました。すべてのコースを通して学生の意欲には驚かされました。歴史や教育の授業では、自分たちが社会をよりよくするんだという熱意が発言からにじみ出ていました。

生活・週末の過ごし方について

<キャンパス内の生活>

教室から徒歩 5 分の大学構内に一人暮らしさせていただきました。リビングルーム、キッチン、バスルーム、ベットルームがあったので快適でした。また、平日はほとんど毎日、部屋の隣にあるジムを使用していました。食事はミールプランがついていたので、食堂を利用しました。バイキング形式で好きなものを食べることができました。食堂に行く代わりにタコスまたは寿司に変更するミールエクスチェンジもできました。プリペイドカードもいただいたので、構内のスターバックスもよく利用していました。学生と同じ建物に住んでいたので、部屋に集まって遊ぶこともありました。

<キャンパス外の生活>

Tutoring hours によくきてくれる学生と仲良くなり、遊びに行くことがありました。歩いて 10 分ほどのところに駅がありましたが、治安が悪いエリアでしたので、車持ちの友人を頼るか、Uber・Lift を使うようにしていました。しかし、Uber と Lift はかなり高いので、一人でかけるときは、電車を使わざるを得ないことも多かったです。この 9 か月のアメリカ生活で 1 番のストレスは駅まで歩き、電車に乗ることでした。日本の安全で整った公共交通機関が恋しかったです。月曜日は大学にシャトルバスが 3 台来るので、スペルマンの学生と一緒に大きな教会に行きました。金曜日の午後は日本人教会のメンバーと集まって Bible study、土曜日は友達と遊び、日曜日は午前と午後で 2 つの教会に行く生活で、学校外の生活もとても充実していました。アトランタのダウンタウンに近いエリアに住んでいたので、訪れる場所がたくさんあり、楽しかったです。有名なスポットは、コカ・コーラミュージアム、オリンピックパーク、ジョージア水族館、動物園、キング牧師の記念ミュージアムなどです。そのなかでもコカ・コーラミュージアムはお気に入りで 3 度行きました。

教会での一枚

モアハウス大学での音楽イベント

長期休みについて

10 月には秋休みがあり、スペルマン大学の台湾人とブラジル人の FLTAs、他大学のブラジル人の FLTA と4人でニューヨークに 4 日間行きました。タイムズスクエアや自由の女神を見て、アメリカを味わいました。12 月からは 1 か月間の冬休みがありました。スペルマン大学の台湾人の FLTA とその友達の他大学の台湾人の FLTA と 3 人で西海岸旅行に行く計画を立てていました。しかし、同大学の台湾人 FLTA が 11 月に緊急帰国してしまいました。これは、アメリカ生活中、最も悲しい出来事でした。そういうわけで、2 人で旅をすることになり、初対面で 2 週間ともに過ごすという初めての体験で緊張していましたが、すぐに打ち解けとても仲良くなりました。初日のラスベガスからバスツアーで訪れたグランドキャニオンは圧巻でした。ラスベガスからロサンゼルスに飛ぶ日、空港に行くバスで携帯のスリに遭ってしまいました。平和ボケしてたなぁと反省しつつ、とりあえずロサンゼルスに飛び、到着後すぐに新しい携帯を買いました。旅行三日目で思わぬハプニングでしたが、今となってはおもしろい思い出です。ロサンゼルスのサンタモニカビーチは景色と雰囲気が最高で、絶対にもう一度行きたいです。その後、サンフランシスコに行き、もう1人の他大学の台湾人 FLTA と合流しました。ホステルのロビーで次の日の予定を話していたら、1 人で旅行をしていた韓国人留学生の子が話しかけてきて、次の日から 4 人で共に旅行することになりました。英語を勉強する理由は、これだと実感しました。英語という共通言語のおかげで輪が広がり、他国に友達ができる喜びを味わいました。その後、ともに旅をした 3 人とは再会を約束し、別れを告げ、サンフランシスコからオハイオ州に飛びました。11 月の Thanksgiving のときも招いてくれた、教会の友人の実家でクリスマスを過ごしました。アメリカのクリスマスは 1 日中、家族での時間を楽しむスタイルで素敵でした。プレゼント交換、ボードゲーム、パズルなど家でアクティビティをしてとても充実した時間を過ごしました。

3月中旬には1週間の春休みがありました。フロリダまでロードトリップし、ユニバーサルスタジオやフロリダのビーチ、公園で野生の動物を見ました。ワニを見つけたときは驚きました。フロリダの温かい気候やゆったりとした雰囲気が好きでした。3 月後半には、12 月に一緒に旅行をした台湾人 FLTA の 1 人がスペルマン大学に遊びにきてくれました。存分に楽しんでもらえるように、アトランタ満喫プランを考えました。次は台湾で再会することを約束しました。

Antelope Canyon

Golden Bridge in San Francisco

帰国後

5 月 9 日にスペルマンでの最終日勤務日を終え、5 月 21 日の職場復帰に向けて帰国しました。帰国したときはやはり、町の綺麗さと、安全さに日本の素晴らしさを感じました。帰国後 1 番最初に食べたものは、コンビニのおにぎりです。感動のおいしさでした。6 月はスペルマン大学の学生がサマープログラム中で日本にいたので、東京を訪れ、原宿や秋葉原で遊びました。1 か月ぶりに会い、彼女たちの明るさからエネルギーをもらいました。念願の日本を最大限に楽しんでいる様子でうれしかったです。もうしばらく会えないのかと思うと寂しいです。6 月後半にはアトランタで毎週行っていた教会のメンバーが日本宣教旅行にきたので、千葉に会いに行きました。まだ 1 か月ほ

東京で再会！

どしかたっていなかったのに、すごく懐かしく感じました。アトランタ生活ですばらしいコミュニティに所属できて、それがこれからも続き広がっていくことは本当に恵まれていると感じます。

職場では、毎日忙しくも充実した日々を送っています。今年度は中学1年生の英語コミュニケーションの授業を担当しています。英語を使って外国で生活し、視野が広がるこのすばらしい経験を通し、英語が使えることの強みを身にしみて感じました。この経験を多くの生徒にしてほしいと思い、授業に気合いが入っています。英語に興味をもって、進んで自分で勉強したいと思えるような、意欲のでる授業をしようと試行錯誤しております。また、ALT の先生と難なく話すことができるようになり、英語力が向上したことを感じます。9 か月間、ネイティブの容赦なく速い英語を聞いていたので、日本に住んでいる方の英語はすごくわかりやすく聞こえます。

これから

アメリカに行く前に比べて、今は日本のことがもっと好きです。日本のすばらしさに気づくことができたのも、他国で生活し、不便さを感じたからだと思います。それと同時に、アメリカでもう一度生活してみたいとも思います。学生のチャレンジ精神や、目的をもってアメリカに住んでいる日本人の仲間を見て、刺激を受ける毎日は輝いていました。これから長い目で見て自分はなにをしたいか、なにをするべきなのか考えながら生活していきたいと思います。

キング牧師像 in モアハウス大学

初めのほうは、クラスで自分だけ見た目が違う外国人というだけで居心地が悪く感じたときもありました。そんなときに、「あなたもここのクラスの一員だよ。」というメッセージを感じられるように接してくれたあるクラスの教授を覚えています。そのとき受けとったやさしさを忘れず、マイノリティとして生活する人々に親切で温かみのある接し方をしたいです。多くの人と関わる中で感じたのは、出身国や言葉の上手さ、また何を成し遂げたかといったことよりも、その人の人柄や思いやりといった「人間性」が大切だということです。今回の経験を通して、自分も新しいことに少しずつ挑戦し、考える力を育てながら、人として成長していきたいと思いました。

最後に、このすばらしい機会をくださった日米教育委員会の方々、家族のように面倒を見てくれた劉先生、応援し支えてくれた家族や友人、快く送り出してくれた職場の方々、いつも激励の言葉をくれた日木先生、ともにチャレンジを乗り越えたフルブライターの仲間、現地での支えとなってくれた JCCA のみなさん、スペルマン sister として接してくれた学生に、心から感謝しています。

フルブライト語学アシスタントプログラム（FLTA）

2024 年度　参加者レポート

横山飛石　University of North Georgia, Dahlonega, GA

ジョージア州北部のダロネガという町にある University of North Georgia に派遣されていた横山飛石と申します。この FLTA プログラムに参加する前は、日本の公立高校で英語教師として勤務しておりました。ここでは、日本の教育現場での経験と比較しながら、このプログラムを通して感じたことや学んだことを紹介したいと思います。

TA としての仕事

University of North Georgia には専任の日本語教授がいるため、基本的にはアシスタントとして働くことが多かったです。まるで教育実習生のように、最初のころは教授のクラスを補助しながら日本語の教え方を学び、慣れてくると私一人で授業を担当することも多くなりました。また、後期からは一つのコースを任され、コースの計画から教材やテストの作成までを自分で行いました。

日本語を勉強している学生の多くは、日本の漫画やアニメなどのポップカルチャーを通して日本語に興味を持ったようでした。『ワンピース』や『ナルト』といった有名な作品だけでなく、日本人でもあまり知られていない作品が好きな学生もおり、改めて日本のポップカルチャーが世界で広く受け入れられていることを実感しました。

【初級クラス】

このクラスでは、初めて日本語を学ぶ学生が大半でした。ひらがなの練習から始まり、さまざまな文法や活用を学び、学期の後半には漢字も勉強します。このクラスで日本語を外国語として教える中で、多くの発見がありました。

一つ目は、日本語の文字の難しさです。日本で生活している人にとっては、子どもでも当たり前に使っているひらがなですが、アメリカの学生たちはとても苦労しているようでした。文字を書くというより絵を描くような感覚に近いのかもしれません。

二つ目は、動詞や形容詞の活用の多様さです。例えば「う動詞」や「る動詞」といった言葉は、これまで聞いたことがありませんでした。日本語のネイティブスピーカーとして、普段は自然に使い分けていたため、特に意識することがなかったのです。日本語を外国語として客観的に見ることで、多くの新しい発見がありました。

【上級クラス】

このクラスの前半は、日本の大学生とのコラボレーションがメインでした。日本の学生とアメリカの学生がそれぞれ自国の教育や大学教育について調べ、お互いに発表し合うという内容でした。

後半は私がすべての授業を担当することになりました。日本の社会問題や文化について紹介するクラスで、教える内容から教材、テストに至るまで、すべて私が作成しなければなりませんでした。日本で英語を教えるときには必ず教科書があり、教える内容が決まっているため、このような経験は私にとって全く初めてのことでした。

どのような日本の文化や社会問題をアメリカの学生に伝えるべきか、授業計画を立てるのに非常に多くの時間をかけました。日本で英語を教えていたときよりも、授業準備により多くの時間を費やしたと思います。この授業準備を通して、私自身が日本について改めて深く知る良い機会となりました。さらに、クラスの中で日本の問題についてアメリカの学生と議論する中で、別の視点からの質問や意見に触れることで、新しい発見もたくさんありました。

【授業を振り返って】

複数のクラスを担当し、学生たちと接する中で私が強く感じたのは、学生たちの日本語学習に対する高いモチベーションと、その成長の速さです。世界的にはマイナー言語である日本語を、わざわざ学ぼうとしているだけあって、彼らの学習意欲は非常に高いと感じました。

学生たちに勉強のコツを聞いてみたところ、授業以外でもアニメやマンガ、J-POP などを通してできるだけ多く日本語に触れることだと教えてくれました。初級クラスではひらがなに苦戦していた学生が、中上級クラスを卒業するころには漢字を使いこなし、日常会話ができるレベルにまで成長していたのです。これは、日本における英語教育の環境とは大きく異なると感じました。

Cultural Event の運営

授業とは別に、日本の文化を紹介するイベントも運営しました。その中で一番難しかったのは、アメリカの学生がどのような日本文化に興味を持っているのかが分からず、試行錯誤しながら企画を進めていったことです。

習字やカルタ、お正月の遊びといった伝統的な文化から、アニメのクイズなどポップカルチャーを取り入れたイベントまで、さまざまな内容を試みました。初回の習字イベントには多くの学生が参加してくれ、その後のイベントでも参加者の数には波がありましたが、学生たちが興味を持つテーマを探る貴重な機会となりました。

最終的に、どのイベントも学生たちにとって日本文化を知るきっかけになったと感じています。運営を通して、私自身も日本文化の魅力を改めて考える良い経験となりました。

履修したクラス

秋学期には言語学と宗教学、春学期には教育や政治のクラスを受講しました。

私はもともと大学で言語学を専攻していたので、昔学んだことを思い出しながら楽しく勉強することができました。クラスには英語話者だけでなく、スペイン語、中国語、そして日本語を母語とする学生も在籍しており、それぞれの言語について自分の経験を踏まえてディスカッションする機会もありました。さまざまな言語を比較しながら学ぶことで、新しい視点を得ることができ、とても刺激的でした。

宗教学や政治のクラスでは、教授が話す時間が非常に長く、その英語を聞き取るのにとても苦労しました。どちらの授業でも専門的な語彙が多く含まれており、内容を半分も理解できていなかったと思います。授業の前に教科書で予習をして行くと、教科書に関連する内容の英語はある程度理解できましたが、教科書に載っていない説明が始まると、ほとんど理解できませんでした。

教育のクラスでは、学生同士でディスカッションする時間がとても長く、一対一の会話では英語で話すことができましたが、4 ～ 5 人でのディスカッションになると、話すスピードについていくことができませんでした。

正直に言うと、この一年間で自分の英語力が大きく成長した実感はあまりありませんでした。特にリスニング力は、まだまだ練習が必要だと強く感じました。

ダロネガでの生活

ダロネガはとても小さな町ですが、おしゃれなレストランや雑貨店があり、自然が豊かで美しい街です。また、治安もとても良いと感じました。私が勤務していた University of North Georgia は、ミリタリースクールでもあり、多くの cadet（士官学校生）が在籍していました。それ以外にも、外国語やビジネス、映画制作（フィルム）など、さまざまな分野を学ぶことができます。

キャンパス内はとても穏やかで、よく学生たちが自分のカバンや財布、スマートフォンを置いて食堂の座席を確保している姿を見かけました。その光景を見て、私は日本よりも安全なのではないかと驚きました。

アメリカでの生活で困ったこと

ダロネガはとても良い街ですが、やはり交通の便はとても不便でした。アメリカは本当に車社会なのだと改めて痛感しました。歩いて 10 分ほどのところにレストランや雑貨店が数件、30 分ほどのところにスーパーが一店舗ありますが、気軽に遊べるような場所はほとんどありませんでした。念のため国際免

許を取得してからアメリカに来ましたが、そもそもレンタカー店がこの街にはなかったため、全く役に立ちませんでした。大学で仲良くなった学生に送ってもらうことが多かったです。

さらに、銀行や税金などお金に関する手続きも非常に大変でした。日本で働いていたときは職場の事務の方が税金の手続きをしてくれましたが、アメリカではすべて自分で行う必要がありました。必要な書類を集め、長い説明を読み、金額や情報を入力していく作業は本当に大変で、このときはChatGPT にとても助けられました。

平日に授業をしている時間はとても楽しかったのですが、週末になると寂しさを感じることが多かったです。特に、日本にいる友人に会えなかったことは、アメリカ滞在中に最も寂しく感じたことでした。

新しいことに挑戦するのはもちろん大切ですが、無理をしすぎないことも同じくらい大切だと実感しました。留学生活の前半は「せっかくアメリカに来たのだから」と、友達や同僚の誘いには積極的に参加していました。日本にいたら行かなかったであろうハロウィンパーティーや、サンクスギビングの大きなホームパーティーにも参加しました。しかし、私はもともとあまり社交的ではなく、新しい人と会うことや大人数の集まりは得意ではありません。そのため、精神的に疲れてしまうことが多く、頻繁に体調を崩してしまいました。そこで後半からは「行きたい時は行く、行きたくない時は行かない」と割り切るように気持ちを切り替えました。そうすることで気持ちが少し楽になり、体調を崩すこともなくなりました。

もちろん、アメリカで１年間過ごすという貴重な経験をする中で、新しいことや日本ではできないことに挑戦することはとても大切だと思います。しかし、それでも性格的に合わないものはどうしてもあります。イベントに参加していても「楽しくないな」「疲れるな」と感じることもありました。そんな時は一人になる時間を作ったり、日本にいる友達とビデオ通話をしました。

日本に帰国してから

早いもので、日本に帰国してから１か月以上が経ちました。私の場合、帰国した翌週から担任として仕事に復帰しました。アメリカでは教えることに専念できていましたが、日本ではさまざまな業務に追われ、忙しい毎日を過ごしています。

正直に言えば、今のところこのプログラムを通じてアメリカで学んだ英語力や、多様な価値観に触れた経験を直接的に活かせているとは言い難いです。それでも、このプログラムで私が得たものは決して無駄ではなかったと信じています。異なる文化や価値観に触れたことで、自分自身の視野が大きく広がりましたし、困難な状況でも柔軟に対応する力や、物事を多角的に考える力が身についたと思います。今はまだ、それらを仕事に直接活かす機会は多くありませんが、これからの教育現場や日常生活の中で、少しずつでも生徒や周囲の人々に還元していけると信じています。そして何より、この経験を通じて培った自信や挑戦する姿勢は、これからの人生において大きな財産になると感じています。